

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



齊藤司郎（一九三六—二〇三〇）昭和十一—令和四

作品名不詳

一九六八頃（昭和四三）年

合板、塗料

一一〇×一六二・二cm

間近で見ると、黒地に灰色の塗料で斜め方向の縞模様が描かれているように見えるが、離れて見ると米国三十六代大統領ジョンソン（右）と同三十七代大統領ニクソン（左）の肖像が浮かび上がる。齊藤は、静岡市出身。早稲田大学法学部中退後、一九六〇年代後半に東京を拠点に同世代の表現者との親交を深め、静岡の前衛集団グループ「幻触」に参加する傍ら、俳優やフリーライターとしても活動していた。

本作は、作家選考を中原佑介と石子順造が手がけ一九六八年に東京画廊、村松画廊で開催された「トリックス・アンド・ヴィジョン展」に出品された。だまし絵的な要素は、他の「幻触」メンバーの作品と共通しているが、マスメディアから受容されたイメージを引用している点に齊藤の独自性がみられる。現存が確認できる齊藤の唯一の作品である。今年度購入により当館の収蔵作品に加わった。

（上席学芸員 川谷承子）

No.
145
2022年度 | 春 |

排除と包摂

館長 木下直之

静岡文化芸術大学の中村美帆准教授による「現代社会と芸術文化―排除と包摂」という授業に招かれ、「排除ア

トと切斷ヴィーナスについて」と題して話をしました。五四人の学生がオンラインで聴いてくれ、後日、全員から感想が寄せられました。対面でやりたかったですね。それならその場で対話が生まれますから。

「排除アート」とは耳慣れない言葉かもしれませんが、排除を目的に公共空間に置かれたさまざまなオブジェを指して使われますが、必ずしもアートのストによる「アート」ではなくても、そう呼ばれてきました。ところが英語では「アート」を使わない。hostile architectureと呼ぶようです。「アート」がどのような役割を担って日本社会にあるのかに関心があり、写真を撮っては「何でもかんでもアート」と名付けたファイルに保存しています。

それにしても、なぜ英語で architect-ure なのか。「建築」と訳せば、(こ)

からは「建築」という明治期の翻訳語をめぐる難問が生じますが、授業ではそこまで踏み込みませんでした。

問題は排除の対象です。私的空間ではなく公共空間に居住する人、長時間滞在する人、極端な場合はそこに横たわる人の排除です。仕切りがあつて、横になれないようにデザインされている公園のベンチがそれですね。企画し、デザインした人が、そこには必ずいるはずです。

他方の『切斷ヴィーナス』は、写真家越智貴雄が二〇一四年に白順社から出した写真集です。おそらくその過激なタイトルが禍いして、初版いまだ完売ならず、とはご本人の弁。病気や不慮の事故で身体の一部を失った人たちの姿を撮った写真集です。

と書いてしまうと暗いイメージですが、写真はその正反対、色鮮やかな義足を身につけた女性たちが楽しそうに笑い、躍動しています。昨年には『切斷ヴィーナス2』(同社)も出版され

ました。

長い間、義足は隠すべきものでした。義足の「義」は義父・義母のそれに通じ、飯の足ですから本物の足に似せて作られました。それを変えたのはスポーツです。見かけではなく、機能を優先させた。その姿が報じられ、歓迎されると、一般のユーザーにも義足を見せたいという気持ちが生まれ、それに越智貴雄がカメラで応えたのでした。

見慣れることが重要です。見慣れないから「排除」が起こる。目を向け、耳を傾けることが大切です。

私が義足の歴史に関心を持つきっかけとなったのがこの写真集でした。なぜ「ヴィーナス」ばかりなのか、男たちはどこにいるのかという疑問から出發したのです。「包摂」を訴える写真集にも、別の「排除」が働いているかもしれない。その追跡の一端は、本誌一三九号の「鈴木祐一『義手足纂論』という本について」(当館ウェブサイトでご覧になれます)で開陳し、その

後も「義足考1904-2020」(『歴史と民俗』三七号)、「義足考1867-1905」(『近代画説』三〇号)と書き進めています。

四年前に、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が制定されました。「障害者」は「障害者基本法」第二条一で、「文化芸術」は「文化芸術基本法」第八条から第一二条で規定されています。これを受けて、静岡県は「障害者による文化芸術活動の推進」の担当部局を従前の健康福祉部障害者支援局障害者政策課からスポーツ・文化観光部文化局文化政策課に切り替えました。

これは、県立美術館の扱う「文化芸術活動」と障害者のそれとが、少なくとも文化行政のレベルでは「包摂」されたことを意味しています。ふじのくに芸術祭と障害者芸術祭が一体的に開催されることも決まりました。それはまた、国による全国障害者芸術・文化祭(厚生労働省)と国民文化祭(文化庁)の一体化の地方自治体版ともいえます。

結局、「排除と包摂」とは、境界線をどこに引くのかという問題なのです。ね。したがって、美術館はそれを今はいろんな文化芸術活動のどこに引いているのか、と自覚することが大切です。この話、もう少し続けます。

近代日本のオルタナティブとしての静岡、その可能性

村上 敬

皆様、御無沙汰いたしております。平成一四年の春から昨九月末まで足かけ二〇年もの間、県立美術館でお世話になりました村上です。このたびあらためて御挨拶申し上げます。き、たいへん恐縮に存じます。さて、私こと、上野に通勤し始めて

この春で半年となりました。上野は將軍家菩提寺の寛永寺があり、彰義隊戦争の舞台ともなった地。ふとした折に葵の御紋に出会っては静岡が思い出されます。

思えば、幕府瓦解ののち家達公とともに駿府にやってきた数え一七の若侍が長じて日本最高の洋画家の一人となつたのはまことに不思議な巡り合わせです。もちろん川村清雄のことです。日本最高云々というのは鼻唄目の入った話ではありますが、西洋絵画の正則課程を現地(川村の場合はヴェネツィア)で修めた最も早い世代の邦人画家、し



川村清雄《波》1913頃-27 (大正2頃-昭和2)、キャンバス、油彩



「夏目漱石の美術世界」静岡展ちらし

かも成績優秀であった、というのは歴史的事実です。

「維新の洋画家 川村清雄」展(平成二四年)は私にとつてとても印象深いものでした。第五展示室に川村の油彩をずらりと並べて眺めた際には、本当に息を呑む思いをしたものです。何よりも底光りするような透感感のある水の表現。オールドマスタは別格としても、近代以降の画家のうち最も巧みに油彩を扱った者の一人であることは間違いないでしょう。

同展の名付け親であった芳賀徹前館長は「夏目漱石の美術世界」展(平成二五年)の発案者でもありました。漱石は英国で学んだ英文学者でありながら、明治日本の上滑りな欧化にはつきりと批判的な目を向けた人物です。彼の小説『吾輩ハ猫デアル』には、輕輕な迷亭とはまったく対照的な伯父・牧山男爵が登場します。明治後期になつても鬻を結い鉄扇を肌身離さず、時勢にそぐわぬ漢学者。しかし、ちゃらつぽこの迷亭の口から語られると、旧弊老人である伯父の方がまともと思われる

てくるのが面白い。彼もまた御一新に伴って静岡に移りそのまま居着いた身の上、駿府遷住者です。

静岡という土地は日本の中でどこか特別なところ、よそにはない部分があります。関東に対する関西というような地理的・文化的な対比の軸ではなく、時間的なものでしょうか。時代遅れということではなく(そういう発想はいかにも皮相に思えます)、近現代の日本がバタバタと追いかけてきたものに對置されるべき、何か重要なエッセンスを抱いている。

各地のミュージアムはその土地の底流をなしている特性・風土を追究する役割を持ちます。静岡においてそれはとても大きくて、近現代の日本全体に對するオルタナティブ(代替物)、わが国が行き詰まったときの処方箋たりうる気がするのです。

結局私は「気がする」だけで出てしまったわけですが、その存在を証しだてる意欲と能力が静岡県立美術館にはあります。関係各所にはぜひ「稼ぐ文化」的なさもしさではなく「稼ぐ文化」的に活動していけるような目配りをお願いしたい。県のブランディングのために無駄にならない投資です。

(東京藝術大学美術館准教授)

兵馬俑と古代中国

～秦漢文明の遺産～

2022年6月18日(土)～8月28日(日)

秦始皇帝陵の兵馬俑は、一九七四年、中国陝西省で村民が井戸を掘っている際に偶然発見されました。そこは、地下に兵馬俑が眠る兵馬俑坑の上だったので。始皇帝は、春秋戦国時代の約五五〇年に渡って続いた戦乱の時代を終わらせ、紀元前二二一年に史上初めて中国大陸を統一した人物です。

兵馬俑坑からは、約八千体もの兵馬俑が見つかっています。そもそも馬俑とは人や動物の姿を写し取った像で、古代中国において信じられてい

た死後の生活のため、故人とともに地下世界に収められた副葬品です。始皇帝陵の兵馬俑を子細に観察すると、それぞれ異なる顔をしていて、ヘアスタイルも一様ではありません。それぞれの出身地域の身体的な特徴が表れているとの指摘もあります。

始皇帝の埋葬のための遺構は広大で、陵園と呼ばれています。「大きなお墓」というより、「祭祀のための街」を想像してもらった方が近いかと思えます。兵馬俑が見つかった兵馬俑坑は、正確に言うと、陵園より東に位置する一角に過ぎません。始皇帝陵の南の背後にある驪山から、北側を流れる渭水の川までが、埋葬に関連する地域とも言われています。そのような大規模な埋葬を行うことができたのは、何よりも中国大陸を統一した強大な国力があったゆえでしょう。しかしながら、秦は、始皇帝が没してからわずか三年、統一から十五年で終焉を迎えました。さて、始皇帝の兵馬俑が最も有名ですが、兵馬俑は、その前後の時代でも作られています。展覧会では、

戦国時代の秦のものや、その次の漢の時代に作られたものも展示します。これらは等身大ではなく、より小型のサイズで作られました。

秦朝の後、漢を創始したのは劉邦です。秦の都である咸陽は、古代中国の領土から言えば西に位置していました。漢もまた、咸陽の近くに長安の都を置きました。このような場所に都があるのは、不便だと思えるかもしれませんが。しかし、地政学的に見ると、そこはとても重要な地域でした。モンゴル帝国やシルクロード、ローマ帝国など、西方との関係にとっては、利に富んでいたのです。出品物の一つである《鎏金青銅馬》はスラリとした美しいフォルムをしています。この史料は、中央アジア



《戦服将軍俑》統一秦、秦始皇帝陵博物院蔵、一級文物



《鎏金青銅馬》前漢、茂陵博物館蔵、一級文物

で名馬を示す「汗血馬」を表しています。前漢の時代に、汗血馬は実際に西域からもたらされることになりました。この一例が示すように、漢は西方からの文化や産物を吸収して栄え、その後のアジアや世界に大きな影響を残しています。

本展は、日中国交正常化五十周年を記念して開催されます。中国国家一級文物（最高級の貴重文物を指す中国独自の区分）二四点や日本初出品を多数含む約二〇〇点により、古代中国の歴史を追体験できる機会です。ぜひ実物をご覧ください。

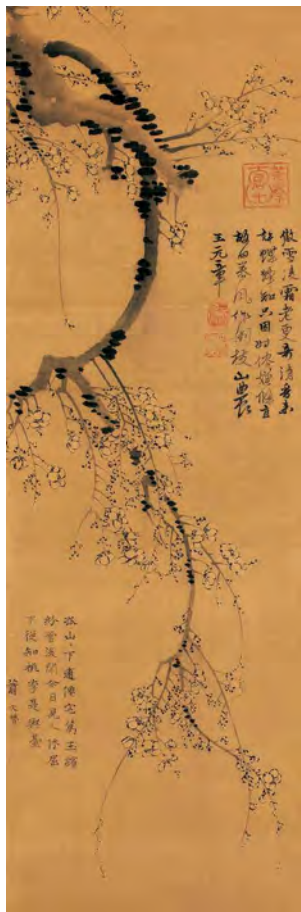
(上席学芸員 植松 篤)

新収蔵品の紹介

当館では開館以来、一七世紀以降の東西の風景画、静岡県ゆかりの作品などの収集方針に基づき、コレクションを拡充してまいりました。二〇二一年度は購入と寄贈により、新たに一四点の作品を収蔵することができました。

〔日本画〕

日本画では、二点の作品を購入しました。狩野探幽《王冕原本 墨梅図》は、江戸時代の巨匠・狩野探幽が、元時代に活躍し、梅を描く名手だった王冕の墨梅図を写した作品です。王冕の墨梅図特有の美しく伸びやかな筆遣い、月の微光を感じさせる墨の濃淡表現などが、探幽の冴えわたる画技によって再現されており、梅のしなやかな枝ぶりが美しい一点です。狩野立信《倣日観葡萄図》は、幕末維新期に活躍した江戸狩野派の画家・狩野立信の優品です。南宋から元初に活躍し、葡萄図を得意



狩野探幽守信《王冕原本 墨梅図》
1664~74（寛文4~延宝2）年
絹本墨画

とした日観の図に基づいて描かれた作品で、巧みな筆墨表現によって奥行きや葡萄の立体感が描き出されています。作品紹介が進んでいない立信の画風を知ることができる貴重な作品です。

〔西洋画〕

西洋ジャンルは、二点の版画作品を購入しました。ひとつは、通称カナレット、アントニオ・カナルの《ランタンのあるポルティコ》です。ランタンが吊り下げられた古いアーチの向こうに、凱旋門や古代ローマの遺跡と思われる建築物が広がる眺めは、故郷ヴェネツィアを主題とする都市景観画を得意とした作者による想像の光景です。もうひとつは、現存する南イタリアの古代港湾都市ポッツォーリの壮大な遺跡と、そこを訪れたグラントツァーの旅行者たちを描いた《ポッツォーリのセラピス神殿》。フランス人ルイ・ジャン・デプレの素描を元にイタリア人フランチェスコ・ピラネージが彫版し

た、手彩色による軽やかで鮮明な水彩が印象的な作品です。

〔現代美術〕

現代ジャンルでは表紙で取り上げた齊藤司郎の絵画一点を購入し、九点をご寄贈いただきました。寄贈作品のうち二点は、日本の現代の抽象絵画史を考察する上で重要な作家の一人である中西夏之が初期に描いた《韻一Ⅴ》（一九六〇年）と、晩年に描いた《グレーの中の白い旋回Ⅲ》（二〇一一年）です。寄贈により中西の絵画思想や作品展開を検証するのにふさわしい重要な作品がコレクションに加まりました。中村宏の絵画三点は、制作時期の早い《人面動物》（一九六〇年）から、一九八六年の《記号2》や一九九六年の《告



ルイ・ジャン・デプレ、フランチェスコ・ピラネージ《ポッツォーリのセラピス神殿》
1781年？
紙、アウトライン・エッチング、手彩色

示（2）》と、幅広い年代のものが揃っており、中村の作品がさらに充実しました。駒井哲郎の銅版画四点は、いずれも駒井の作品集への収録作で、個人所蔵家が長らく大切にしていたものです。

ご寄贈くださった方々（五十音順）
太田正樹氏
原雄太郎氏
日比野秀男氏
記して謝意を表します。

新収蔵品展
二〇二二年五月二十四日（火）～
七月十八日（月・祝）
会場：本館第七展示室



中西夏之《韻一Ⅴ》
1960（昭和35）年

中庭の謎について

首席学芸員 新田建史

さて、人の記録と記憶についてお話ししたいと思う。

事の起こりは、今年四月から開催される「大展示室展」(四月二日(土)～五月十五日(日))を準備していた時のことである。

この展示会は、美術館という建物を持っている作品保全や展示についての様々な機能や設備をご紹介すると共に、美術館創設期の様子をご覧頂くものである。このために古い資料を調査していた私に、同僚から声がかかった。

「レストラン側の中庭にある石の壇みたいなもの、何なんですか？」

図1が件の壇である。

黒い御影石製で、実技室前廊下から中庭に出ると、二段の階段で上がるようになっており、高さ約五六cm、幅は一七六・五cm、手前が方形、向こう側が半円状に弧を描いており、手前から円弧の頂点まで三二五・二cmある。壇にはさらに一五・五cm程の上段があり、九〇度右折すると、また階段を経てレストラン側に向かって石の通路状モチーフが約一三mほど延びている。

これは一体何なのか。

私はこの美術館に奉職して二〇数年だが、本来の目的は聞いたことがない。先輩学芸員に訊いたこともあったが、「……さあ？」という返事だった。一回だけ、現代美術の作家がこの上に茶室を設置したことがあったが、他には何か置かれたこともないだろう。要するに、現在の職員は誰も知らない。

この壇が載っている建築図面も、実は一



図1 中庭の石壇



図2 《静岡県立美術館建築基本構想案 配置図》(C案)前庭部分左側水路の突き当りが噴水

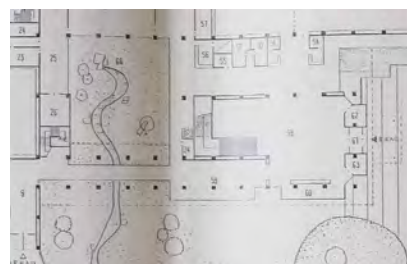


図3 《静岡県立美術館建築基本構想案1階平面図》(中央部分)

つしかない。「昭和58年度 静岡県立美術館建築工事 石工事」という冊子がそれなのは、施工部位として中庭に図示されているものの、詳細図がない。名称も不明である。

ロタン館建設時に作成されたと思われる模型が現存しており、ここにはこのモチーフがしっかりと再現されているが、やはり現存している、美術館本館の基本設計を進める際に製作された模型には、この壇はまだ登場していない。

大展示室展に係る調査を進める中で、この壇が何であったのかについて、示唆してくれる資料があった。

まず、美術館建設計画最初期の基本構想案である。

美術館は元々、静岡市内の駿府城公園内に建設される予定であった。一九八一(昭和五六)年三月に建築基本構想提案が募集され、八月に建築基本構想が決定している。この時、現存する資料から判断する限りA、B、Cの三案が提示され、その内B案が採用

されたと思われる。これら三案のいずれも、駿府城の中堀に囲まれた北西の一角、西門橋から北御門橋の間に位置しており、堀の北側を背にして、建物正面には堀を連想させる水場が配されている。かつて駿府城には三重の堀があり、現存する中堀の内側には内堀があったので、これを記念するモチーフを配することが案の条件とされていたのかもしれない。配置図の現存するB案、C案を見ると、このモチーフへと続く水路が設けられ、園地を巡るその始点には噴水を配する(図2)という点で共通する。

この、園地の中を進む水路、という形が、当館中庭に残る石壇の原型の一つではないか、というのが現在の仮説である。

中世遺構が検出され、建設予定地が駿府城公園から変更されてから後、移転先候補の一つが県文化センター(当時)の敷地であった。『静岡県文化センター(園地のあらまし)』(一九七〇年)という小冊子によると、ここは県立中央図書館、静岡女子大学を内包した施設であり、現在県立美術館

の建っている辺りには音楽ホールが、ロタン館よりやや北北東に寄った位置には美術博物館が建設される予定であった。現在の県立美術館建設が決まったのは一九七九（昭和五四）年一月なので、この冊子で示される美術博物館は、別個の構想だった筈である。

この県文化センターへの移転構想には立地に二案あり、一つは現在の図書館よりやや北西、芝生公園に少しかかる辺り（A案）と、もう一つは県立図書館に隣接した、現在の建物地点（B案）である。A案を見ると、建物本体のほぼ真ん中に中庭を設け、ここに通路のような、水路のようなモチーフが配されている（図3）。通路にしては形が不定形であり、建物廊下を挟んで屋外から貫通する構造なので、水路として構想された可能性が高いと感ずる。噴水は無いが、「園地の中の水路」という構想は引き継がれている訳である。

ここで開館当初の現在の建物の中庭を思い浮かべてみると、白い玉石を敷き詰めた中を、黒い石壇と通路が貫通しており、その周囲をなだらかな築山が取り囲んでいた筈である。この玉石と築山という組み合わせは、禅寺の石庭を容易に連想させる。玉石は海なし水を、築山は陸なし山を表すことになる。だとすれば、園地を通る水路もしくは小川というかつての構想が、水景の中の小道へと、表裏転換されたものと考えられる。

開館年度の一八八六（昭和六一）年十二月に発行された『静岡県立美術館要覧』を

見ると、建物紹介の中でわざわざ「中庭（Court）」が取り上げられ、眩しいような玉石の庭と、竹がまばらに植えられた築山とが写真付きで紹介されている。玉石が汚れてしまい、何故か椿まで大きく生えている現在とは異なり、建設当時の中庭はそれなりにストイックで、紹介するに足る庭だったのである。

このように見てくると、駿府城公園内を立地とした美術博物館構想の時から、現在の建物に至るまで、園地、水、小道という組み合わせが一貫しており、それは駿府城の堀に由来するものだと推測される。冒頭に述べた通り、この設計意図は実質上見えなくなっており、今回調査によって推測することが出来たものである。未整理とはいえ、当時の資料が残っていたからこそ可能だったのであり、記録というものがいかに重要であるかを示している。

反面、ただかだか四〇〇年度の年月で、最早経緯が曖昧である。折々の記録は残っていても、それらが何故記録されたのか、どのような意味を持つのか、その文脈が与えられなければ、記憶には残らないのである。歴史を扱う者の一人として、深く反省させられる次第であった。

- 1 二〇〇三（平成一五）年度に開催された「静岡 NEW ART 展 わたしの居場所」内の企画、横山飛鳥によるインスタレーション、二〇〇四（平成一六）年一月六日（火）〜二月一日（日）
- 2 図面を取納している小部屋には、開館準備室以来の資料や資材が重なり、まだ発見整理されていない図面がある可能性が残っている
- 3 この模型には「平成六年三月開館」という文言

が付されており、ロタン館が開館する一九九四（平成六）年三月より前、おそらくロタン館建設工事が着工される一九九二（平成四）年四月よりも少し前に製作されたのではないかとと思われる。

4 この模型には、「昭和五十八年度静岡県立美術館基本設計」という文言が付されている。現在の立地が決定したのが一九八三（昭和五八）年六月、建築の基本設計が完了したのが同年九月なので、この間に製作されたものだと思う。

5 静岡市公式サイト「駿府城跡・駿府城跡天守台発掘調査」(https://www.city.shizuoka.lg.jp/000_002441.html)より。

6 応募案の条件については現在判明していない。基本構想C案の配置図には、建物前の水を張ったモチーフに「内濠のメモリーとしての水景」という説明が付されている。

7 これも応募案の条件であったかもしれない。模型を確認すると、噴水側が池もしくは堀よりも高くされている。

8 刊行者は静岡県文化センター建設事務所。刊行年は記されていないが、県立女子大学のことを「昭和四十二年にこのところに開学した四年生「ママ」の大学で、明春第一回の卒業生を送り出します」と説明している。また県立図書館のことを「昭和四十五年四月開館します」と説明している。これらのことから、この冊子は一九六九（昭和四四）年度の年度末に近い頃、一九七〇年の初頭に刊行されたものと考えられる。

9 昭和五十八年五月一七日付の「静岡県立美術館建築基本構想案について」という文書にこれらA、B案の配置図コピーが添付されているが、元になったA、B各案はまだ発見されていない。文書に添付された図面からは、A案の中庭に見られるもの名称は書かれていない。

10 例えば、石庭を解説した田中正大は「童安寺の石庭ほどでないにしても、狭小な空間に山水を表現しようとするならば、どうしても象徴的な方法をとらざるをえない。「中略」二つの石を立てて滝口や遠山を、砂で流れや海水を象徴するというような「ことになる」と述べている。田中正大「禪寺と石庭」p.227-230、「禪寺と石庭」、一九六七（昭和四二）年初版発行、小学館、原色日本の美術第一〇巻

11 何故小道を段のある石壇にしたのかは不明だが、駿府城公園内の美術博物館構想C案には、平面プランの共通を連想させる「天守ひろば（彫刻ひろば）」が建物正面に設置されていたことを付記した。



本の窓

山田久美子著
『狩野友信―最後の奥絵師、幕末・明治を生きた』
水声社 二〇二二年

当館では、昨年「忘れられた江戸絵画史の本流」展を開催したように、江戸狩野派に光を当てる活動を行っている。本展では80名の江戸狩野派を紹介したが、その殆どが忘れ去られた画家であった。本著が取り上げる友信は江戸狩野派のなかでも著名で、静岡とも所縁の深い画家だが、一般的な知名度は低い。江戸狩野派で単著のある画家といえは狩野探幽だけという状況のなか、本著で友信が取り上げられたこと自体、画期的である。友信は、幕末から明治に活躍した、浜町狩野家の9代目当主となった画家である。明治維新後、東京大学、東京美術学校や東京聾啞学校に奉職し、多くの画家を育てた。アーネスト・フェノロサら、来日した外国人との交流でも知られる。本著は、友信の交友関係を丁寧な追いつ、その生涯を浮き彫りにしようと試みたものである。アイルランド文学を専攻する著者は、美術史研究者とは異なる観点から、友信の実像を明らかにしてくれる。

（上席学芸員 野田麻美）

新たな暮らしの中で

実技室エデュケーショナルスタッフ 中島友絵

私が着任してからの二年間を振り返ると、新型コロナウイルス感染症対策と共に過ごしてきた日々でした。安全のために、中止や人数制限せざるを得ない状況と常に向き合ってきました。その中で新たな取り組みもありました。私が初めて担当した講座は、実技室初のリモートでの講座でした。県外在住の講師のアトリエと実技室とをオンラインでつなぎ、作品制作に取り組みました。その他、紙芝居の読み聞かせや粘土遊び等の動画配信を行いました。ボランティアの皆様をはじめ、たくさんの方々のお力添えを賜り、実技室は成り立っています。この場を借りて御礼申し上げます。



リモートでの講座にて、講師からの説明をホワイトボードに板書する筆者（2020年撮影）

実技室には、各プログラム内容により、ますが三歳から九十歳代の方まで実に幅広い方がお見えになります。皆様からあるがたい言葉も嬉しく

励みになっております。創作週間やロダンの館デッサン会にて「毎回とても楽しみにしているの。いつもありがとうね。」と、長年いらしてくださる方。実技講座やわくわくアトリエにて「参加できてよかったです。」と完成作品をみせてくださる方。美術館教室にて「みてみて！できたよ！...あ！もったいいこと思いついた！」と元気いっぱいのお子様方。「学校ではここまでダイナミックにはできないのでありがたいです。」としみじみと伝えてくださる先生方。開放日にて「親も夢中になっちゃいました。」と照れながら伝えてくださる保護者の方。ちょっと体験にて「通りがかりにこんな体験ができて嬉しい！」と驚きと喜びを伝えてくださる方。マスクをつけているためお互いに表情が見えにくい状況ではありますが、参加者の方々の心からの笑顔を感じるひとときです。微力ながらも役に立てたと思うと喜びがこみ上げてきます。私は当館の教育普及活動の一環を担う実技室の運営に携われることをとても嬉しく、そしてありがたいと思っております。今年度も引き続き感染症対策に努めて活動してまいります。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoe.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

NEW !

デジタルアーカイブ 2022年4月1日公開

<https://spmoe.shizuoka.shizuoka.jp/archive/>

静岡県立美術館の収蔵品情報を大きくパワーアップさせて、4月1日(金)に公開します。公開に併せてオーギュスト・ロダン《地獄の門》の3Dモデルと、池大雅《蘭亭曲水・龍山勝会図屏風》(国指定重要文化財)の超高精細画像をウェブ上で公開します。また、館長 木下直之がプロデュースする動画も公開します。

VR 地獄の門

ロダン館を代表するオーギュスト・ロダン《地獄の門》の3Dモデルを、実物の作品をスキャンして制作しました。展示室では見ることができないような、VRならではの《地獄の門》をお手元でご鑑賞ください。



池大雅 超高精細画像

当館が誇る重要文化財、池大雅《蘭亭曲水・龍山勝会図屏風》の細部まで自在に拡大できる高解像度の画像を撮影しました。描かれた人々の表情や筆致などお好きな部分を心ゆくまでご覧ください。



※画面はいずれも開発中のものです。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。